

■ 研究論文

# ラーニング・コモンズにおける学習支援に関する一考察

## A Study of Learning Support in the Learning Commons of Utsunomiya University

桑島 英理佳<sup>※</sup>  
Erika KUWAJIMA

**要旨：**宇都宮大学のラーニング・コモンズは学生の主体的な学習を目指し開設され、話し合い学習を行う場として学部学年問わず自由に利用できる施設である。そこで筆者は学習支援者として話し合いの進め方やワークショップ企画の仕方等の学習相談に対応していた。本稿の目的は学生の主体的な学習活動を促すラーニング・コモンズにおける学習支援において重要な視点とは何かについて考察することであり、ラーニング・コモンズを拠点にグループを立ち上げ主体的に学習活動を行っている学生にヒアリング調査を行った。そして学習支援に重要な視点として、学生に芽生えた関心をタイムリーに傾聴すること、教員や他部署と連携すること、様々な学習機会に参加し学生と対話することの3つを確認することができた。

**キーワード：**ラーニング・コモンズ 主体的な学習 学習支援 関心 傾聴

### 【目次】

#### はじめに

#### 1章 調査の概要

- 1節 調査の目的
- 2節 調査方法
- 3節 調査対象と調査期間
- 4節 調査項目

#### 2章 調査結果

#### 3章 学習支援の視点

#### まとめと今後に向けて

### はじめに

宇都宮大学では、2013年6月から「ラーニング・コモンズ」という学習スペースを運営している。「ラーニング・コモンズ (Learning Commons)」とは、1980年代のアメリカにおいて誕生したもので、従来の図書館のように沈黙のなか自主勉強を行うスペースではなく、む

しろ活発に学生同士で話し合い学習を行うことを推奨し環境を整えたスペースのことで、近年日本においても設置する大学が増えている [1]。

宇都宮大学も基盤教育センターが2013年6月に設置した。講義で学んだ知識を用いて課題解決に向けた行動に結びつけていくための能力である「行動的知性」[2] (課題解決能力、コミュニケーション力、協調性など) を培うことを目的に、学生同士で活発に話し合いを行うことで思考を深め、実践を企画していく主体的な学習を期待し開設に至った [3]。

本学の「ラーニング・コモンズ (以下、コモンズ)」の特色のひとつとして、運営を担当するスタッフである特任教員やスペース内に常駐する事務補佐員が配置されていることがあげられるだろう。筆者は2013年6月の開設から11月までの半年間、後者の事務補佐員を務めた。午前10時から午後5時30分までの勤務時間に、スペースの管理や周知活動、事業の企画実施、学習支援を行った。授業で出されたグループ課題やサークルのミーティングを行う学生の他、昼食を取りながら友人と談笑する学生で日々にごわいを見せるようになった中、学生自らワークショップを企画してみたい、共に活動するグループを立ち上げたいという相談を受けるようになり、コモンズを拠点に活動する学生グループの誕生に繋がった。

そこで本稿は筆者が行ってきた学習支援についてふり

※ 宇都宮大学地域連携教育研究センター 特任研究員

返り、学生の主体的な学習活動を促すラーニング・コモンズにおける学習支援において重要な視点とは何かについて考察することを目的としている。

ヒアリング調査期間：

2014年8月18日(月) 16:00～17:30

於：宇都宮大学ラーニング・コモンズ

## 1章 調査の概要

### 1節 調査の目的

コモンズを拠点とし主体的に学習活動している学生たちが、どのような経緯で関心を持ちグループを立ち上げ活動してきたか、コモンズの学習支援者の関わり、学習活動が授業の臨み方にどのような影響を与えたかについて明らかにする。

### 2節 調査方法

コモンズを拠点にグループを立ち上げ主体的に学習活動を行っている学生3名にヒアリング調査を行った。うち1名に対しては個人面接法で、2名に対しては集団面接法で調査した。

### 3節 調査対象と調査期間

調査対象とフェイスシート、調査期間、調査場所については以下にまとめた。

#### ① Tさん(学生団体「CODE」代表)

本学の1、2年生が、大学生生活の早い時期から卒業後就きたい職業について考え準備することを目的とし、様々なワークショップを企画運営している団体「CODE」を仲間2名と共に立ち上げた。2014年8月現在、「CODE」の活動の他、起業を支援する企業(宇都宮市内)にインターンしており、多忙な毎日を送っている。

ヒアリング調査期間：

2014年8月20日(水) 10:30～12:00

於：宇都宮大学ラーニング・コモンズ

#### ② Oさん、Sさん

(それぞれサークル「らいと」代表、副代表)

人権問題や食糧問題等の身近な社会問題をテーマに映画上映会やワークショップを企画・実施するサークル「らいと」を2人で立ち上げた。2014年8月現在、活動のきっかけとなった映画の上映会とワークショップの企画を目指しメンバー4名で話し合いを行っている。

## 4節 調査項目

### (1) 現在の活動

メンバーの人数、定例会について、主催イベントについて、コモンズをどのように利用しているか、課題と展望、必要としている学習支援等

### (2) 学習活動の経緯

関心を持つようになったきっかけ、メンバー増員の方法、活動を続けられた理由等

### (3) コモンズの学習支援者の関わり

相談に来た経緯、他に相談した機関や教員等、学習支援者の対応で印象に残ったことや役立ったこと、学習支援者に望んだこと、改善してほしいこと等

### (4) 活動を始めて学生生活において変化したこと

授業の臨み方、新たに関心を持ったこと等

## 2章 調査結果

ヒアリング調査結果を、学習活動の経緯、学習支援者の関わり、授業の望み方の変化の3点に分けて述べる。

### ① Tさん

#### 【学習活動の経緯】

Tさんは高校生の頃から、本業の傍ら様々な起業をしていた父親に、大学生になったら起業するようと言われていたそうである。宇都宮大学国際学部に進学し専門科目「国際キャリア実習」を履修し、2013年8月に2週間タイの企業にインターンしてきた。タイで企業の社長や他企業で働く宇都宮大学出身の先輩と出会い刺激を受け、「大学時代を無駄にしたくない」と感じたそうである。帰国後、共にインターンを経験した学生から「NPO法人とちぎユースサポーターズネットワーク」の紹介を受け、起業に関するセミナーとインターンシップに参加した。

タイでのインターンシップから起業セミナー、起業に関するインターンシップという一連の体験から起業してみたいという思いを持つようになった。そして起業という

夢を叶えるためには、学生同士でキャリアについて考えるイベントを主催することが「最初のステップ」になると考えていた。

2013年9月30日、先輩に誘われてコミュニケーションやプレゼンテーションに関する講座を企画運営している学生グループ主催のイベントに参加した。イベントの目的は、グループのメンバーはもちろん、メンバーではなくてもグループに関心がある学生の親睦を図ることだった。イベントに参加している最中、主催者である3年生たちが多くの参加者を集めイベントを主催していることに対し、あこがれと同時に「負けたくない」、「自分にもできるのではないか」といった競争心を持った。そして「3年生がやることを2年生のうちにやれば」「力がつく」と考えた。さらにイベント終了後その日のうちに、参加していた同じ国際学部2年生2名に対し自分たちもイベントやワークショップを主催しようと提案したところ意見がまとまり、「学生団体 CODE」（以下、「CODE」）がスタートした。

#### 【学習支援者の関わり】

上記のイベントには、コモنزの学習支援者である筆者も参加していた。そしてTさんから将来起業したいという旨の相談を受け、話を聴くこととなった。

その後、Tさんはしばしばコモنزに訪れ、「CODE」によるワークショップの企画について相談した。そこでワークショップを開催する目的について問い、まとまりのない考えをまずは傾聴し整理し、ワークショップの手法を紹介した。やがて「CODE」の定例会がコモنزで開催されるようになり、彼らはアドバイスしたワークショップの手法を行錯誤の上アレンジし、2013年12月1日に第1回のワークショップを実施した。

Tさんは筆者がコモنزを退職した後（2013年12月以降）も、勤務時間終了後にアドバイスを求めてきた。「CODE」の活動以外にも、個人的に参加するビジネスプランコンテストに応募するプランについて相談を受けたので、自分だけのアドバイスに止まらず、そのジャンルに詳しい研究員を紹介することでTさんはより専門的なアドバイスを受けることができた。

#### 【授業の臨み方の変化】

「CODE」の活動を始めて授業の臨み方において変化したことは、既に得ていた知識を意識的に組み合わせるようになったと語っている。また、基盤教育科目「起業の実際と理論」を履修したが、起業には簿記の知識が必要だと知り、簿記の授業も聴講するというように学びが広がっていった。

#### ② Oさん、Sさん

##### 【学習活動の経緯】

OさんとSさんは同じ馬術部に所属していたことから仲が良くなり、ある日映画館で『The Lady アウンサン スーチー 引き裂かれた愛』（以下、『The Lady』）を鑑賞した。鑑賞した感想としてOさんは、日本でも他国でも社会問題が報道されることが少ないこと、弱い立場に置かれている人からの情報発信がないことに疑問を持ち、その思いを多くの人に伝えたいと感じた。Sさんは自分が住んでいる日本が他国に対して何をしてきたかについて知りたいと感じた。

Oさんは高校生の頃から発展途上国を支援する職業に就きたいと考えていた。そして大学に進学し基盤教育科目「社会学入門」において発展途上国の現状について学んだことで、日本では他国で起きていることが報道されていないとなんとなく感じていた。そして『The Lady』を観てその思いは確信となった。一方Sさんは、英語の教員だった祖父の影響で幼い頃から他国に関心があったそうだ。高校生の頃に JICA について調べたことが発展途上国の問題を知るきっかけになった。

2人は『The Lady』の鑑賞後、「もやもやするね」と語り合った。その後、『The Lady』の舞台であったミャンマーに関する勉強会（宇都宮市国際交流協会主催）に参加したことで学習意欲が高まり、多くの人に伝えたいと『The Lady』の上映会を企画することを話し合い合意した。Oさんは以前履修した「社会学入門」の担当教員に上映会の開催について相談のメールを送った。しかし教員の返信は近々海外出張があるため協力できないというものだった。次に、Oさんが所属しているゼミの担当教員に相談してみると、上映会を実施するには資金もスタッフの人数も必要で、さらに企画者が知識を持っていることが必要であるとアドバイスは受けたが、Oさんは担当教員にこれ以上計画性も具体性もない事は相談するものではないと感じた。途方に暮れ他に相談できそうな教員や部署を探した。留学生・国際交流センターの存在は知っていたが、「接点がないのでいきなり行くのも気が重い」と感じ、訪ねることはなかった。そして話し合い学習や講座の企画について取り扱っているコモنزの存在をパンフレットで知り、2013年6月に相談しに行った。

##### 【学習支援者の関わり】

上映会を主催したいと思った経緯や目的について丁寧に聴き取り、Oさんに様々な考え方を共有したいという思いがあることが分かったので、映画鑑賞後に参加者同士で感想を語り合うワークショップを行うことを提案した。OさんとSさんはしばしばコモنزで話し合いをす

るようになり、筆者は2人を見かける度に声をかけ、必要に応じて進捗状況を傾聴し、ワークショップに関する授業や参考文献を紹介した。また、人権学習を研究している教員を紹介し、共に研究室を訪れ教員と対話をする時間をつくった。さらに、2人が関心のありそうな食糧問題をテーマに活動している他学部の学生を紹介した。似た関心を持つ人たちと話をすることは2人にとって新鮮で活動を続けるモチベーションにもなったようである。そして2人は話し合いを重ねるうちに、サークルを立ち上げ仲間を増やすことを目指すことにした。筆者もサークルの目的やキャッチフレーズなどの話し合いに参加しアドバイスした。このような関わりに対しOさんは「コモンズのスタッフに聞いてもらおうと考えがはっきりしてきました」、「客観的に見てもらえるのはうれしいです」と、Sさんは「こっち（自分たち）もやらなきゃと（思い）、それで続けられた」とふり返る。

そして新たなメンバー2名が加わり、サークル名も「らいと」と決まり、2013年の秋頃からコモンズで定例会を開催するようになった。OさんとSさん、コモンズの担当教員、筆者の間で打ち合わせを行った結果、一度コモンズでワークショップの練習を試みることにになり、ワールドカフェという手法で実施することを決めた。ワールドカフェの進め方について知りたいと求めてきたので、詳しい教員に講師を依頼しコモンズのセミナーとして開催した。この頃には筆者は既にコモンズから他の部署に異動していたが、勤務時間終了後に求めに応じてワークショップの企画についてアドバイスした。2014年1月28日にワークショップの練習が実施された。

しかし企画した本番のワークショップ（2月6日）には参加者が集まらず開催することができなかった。筆者はそのような状況を見守り、後任の学習支援者と相談し、経験をいかし今後も活動を継続するためのアドバイスをした。さらに、女性の人権問題に関心があることが分かっていたので、学内にある女性研究者キャリア支援室のコーディネーターに繋ぎ、メンバーは学外で開催されるワークショップの紹介など継続的に支援を受けることができた。そして5月12日に再び同じテーマで上映会とワークショップを開催し18名の参加者を集めることができた。

#### 【授業の臨み方の変化】

「らいと」の活動を始めて授業の臨み方において変化したことは、2人とも授業で学んだことと自分の生活の関係性について考えるようになったことである。さらにOさんはワークショップやファシリテーションについて学びたいと思ったことから筆者が紹介した授業「ワーク

ショップで学ぶ 変わりゆく現代社会の中の私たち」（基盤教育科目）を履修したことで、ファシリテーションは活動以外にも研究などにも役に立つと気づいたそうである。

## 3章 学習支援の視点

以上を踏まえ、学生の主体的な学習活動を促すラーニング・コモンズにおける学習支援において重要な視点を分析し考察する。

### (1) 芽生えた関心をタイムリーに傾聴すること

学生が持つ関心を主体的な学習活動に繋げる為には、漠然としてとりとめもない段階であっても、学習支援者は丁寧に傾聴する必要がある。しかも関心が薄れてしまう前に、学生が話したいと感じた時に傾聴することが望ましい。

Oさんは、映画『The Lady』をきっかけに、それまでなんとなく感じていた社会問題について報道されることが少ないという思いが溢れ出し、多くの人に伝えたいと考え、上映会の仕方についてコモンズに相談に来た。そこで上映会の目的は何かを問われ、ワークショップという手法を知り、効果的な学習にする為にはどのようにしたら良いか考え、まずはサークルを立ち上げるといった学習活動に展開していった。OさんとSさんが話し合いを行う際、筆者はさりげなく声をかけ、必要に応じて進捗状況を傾聴し、情報提供することに努めた。このことで2人は自分たちの考えを整理することができ、かつ学習活動のモチベーションを維持することができたという。

自明のことではあるが、「大学時代の学生の学習や発達は、授業という枠には収まらないもの」[4]である。部活動やサークル活動、アルバイト、インターンシップ、就職活動、ボランティア、恋愛、家族や友人との語り合い等、大学の授業の枠を越えて、日々の生活のなかで様々な関心が芽生えている。そして関心を深めるための主体的な学習活動が授業に臨む姿勢を変えている。今回の調査対象者全てが授業において自分の生活やこれまで得た知識に引きつけて思考するようになったと語っている。

以上のことから、授業のみならず日々の学生生活から芽生えた関心について、学生が話したいと感じた時にとりとめのない思いであったとしても受容しながら傾聴し、考えを整理する役割が学習支援者には求められるのではないだろうか。そして学習支援者は関心が失われぬうちに主体的な学習活動を目指し次の学習ステップを促す

必要があるだろう。例えば似た関心を持つ他の学生と交流する、関連授業を履修する、事業企画に挑戦する等が考えられる。寄り添いながら共に関心の芽を育もうとする姿勢、つまり学生のエンパワメントを支援する姿勢がラーニング・コモンズの学習支援者に必要だと考えられる。

## (2) 教員や他部署との連携

コモンズで語られている学生の関心は実に様々である。授業や学部を超え、対等に自由に語り合う場として、コモンズは今後益々必要となるだろう。

1 節で述べたように、関心が失われないうちに傾聴し、さらに主体的な学習活動を目指し次の学習ステップを促すべき学習支援者は、扱う分野が多岐にわたるので、言うまでもないが積極的に情報収集するべきである。まずは学内にどのような専門分野や関心を持つ教員がいるか、またどのような手法で授業が行われているかについて把握するべきであろう。また学生ボランティア支援室や留学生・国際交流センター等の部署の情報も必要になるだろう。

ビジネスプランについて相談してきた T さんに対しその分野に詳しい研究員を紹介したことで、彼は専門的なアドバイスを受け、アイデアを広げることができたという。ワークショップに関心があった O さんにはワークショップを専門とする教員の授業を勧め、彼女は履修してみたことでワークショップやファシリテーションの汎用性に気づききっかけとなった。このように、教員や他部署の情報を持つことで様々な関心を持つ学生をすぐに繋げることができる。しかし、先方にスムーズに学生を受け入れてもらうためには、まず、学内におけるコモンズの役割を積極的に発信していく必要があるだろう。

さらには学外の青少年施設等の社会教育施設や NPO も多様なジャンルを多様なアプローチで取り上げており、他大の学生や社会人との交流による様々な気づきも期待できるので、連携体制をつくっていききたいところである。

## (3) 様々な学習機会に参加し学生と対話すること

起業に関心を持ち「CODE」を立ち上げた T さんと筆者が対話できたきっかけは、他の学生が主催したイベントだった。主催者である学生たちがコモンズで話し合いや準備を重ねてきた成果を見てみたいと考え取材も兼ね

て参加したが、そこでは思いもよらず、ある一つの関心を持った新たな学生との出会いがもたらされた。

このように、学習支援者がコモンズ内に止まらず学生や他部署が主催する様々なテーマのイベントや講座に参加し、積極的に学生と対話してみることで、誰がどのような関心を持っているかについて知ることができる。そこで得られた情報は、似た関心を持つ学生同士のコーディネートという学習支援に役立てられるのである。

## まとめと今後に向けて

以上、学生の主体的な学習活動を促すラーニング・コモンズにおける学習支援について 3 つの視点について述べた。ラーニング・コモンズは、空間整備や単なる受付の設置だけでは学習空間としては成り立たないということを垣間見ることができたと言えるのではないだろうか。ラーニング・コモンズの学習支援者は、学部を越えたファシリテーターとして学生に寄り添い、まずは対話を通して関心を明確にしていく。そして主体的な学習活動を目指し、関連する授業や教員、学内外の関連機関等に繋いでいく力量が特に必要である。

今後も学生へのヒアリング調査を継続し、より効果的な学習支援について考察していきたい。また、学習支援者の力量形成についても今後の研究課題としたい。

## <参考文献>

- [1] 山口祐平編「学びの空間が大学を変える」ポイックス(株) 2013、p.102
- [2] 廣内大輔「1. プロジェクトの概要～ 21 世紀型教養教育の必要性～」宇都宮大学基盤教育センター「平成 25 年度宇都宮大学プロジェクト経費実践報告書」p.2
- [3] 宇都宮大学ラーニング・コモンズ  
<http://lgec.utsunomiya-u.ac.jp/lc/index.html> を参照のこと。
- [4] 名古屋大学高等教育研究センター「ティップス先生からの 7 つの提案 教務学生担当職員編」  
<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/studentaffairs/index.html> (閲覧日: 2014 年 8 月 12 日)